

# 野鳥だより

—北海道—

第 5 号

編集者 北海道野鳥愛護会  
発行者 北海道国土緑化推進委員会  
発行日 昭和46年2月発行  
5月・8月・11月・2月 年4回発行

北海道の冬は長くきびしい。

しかし、この北国の生活を楽しく工夫をこらすことも大切である。ある人は 北海道は一年中、冬であるという。なるほど春になつたと思う間もなく、もう冬の燃料の心配をする。冬の気分から解放されないゆえんである。だが、北海道の生活に抵抗するよりも、北海道らしい生活を楽しむ。こんな知恵も大切である。

とくに、冬の北海道を生活の中にとり入れよう、こうした生活改善の意味で、冬を楽しんでいる人がいる。札幌市郊外藤の沢に住む小沢広記さんである。

小沢広記さんが冬の給餌台を設けて十年になる。近くの立木に、トウモロコシや、リンゴを吊し、肉の脂身をゆわえつたり、ヒマカゲラも、ツグミも、コウライキジも、そしてリスさえ仲間入りをするようになった。その数は年々ふえているという。

小沢さんにとって冬が楽しいのである。「去年のあいつはどうしたろう」と、古い知己の訪れを待つ。一陣の風が吹くように、古いあいつが顔を見せる。里帰りした娘のようである。

今年も札幌市内にも、一月下旬にキレンジヤクの大群が来た。市内のナナカマド、イボタの垣根にむらがつて終日、私たちの目を楽しませてくれた。えさを与えれば野鳥はいつでも私たちの身の回りにいる。

## 冬の給餌台

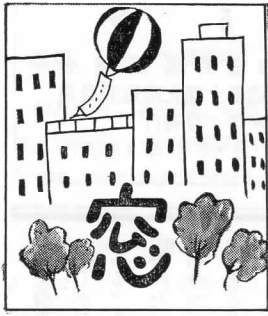
野鳥を身近かに

ワリの種を古ぼけたテ  
ーブルに散らしたり、  
ただそれだけのことで  
ある。

最初はスズメしか来  
なかつたそうである。  
「スズメでもいいさ」  
こんなのんびりした氣  
持が通じたのか、ヒョ  
ドリが来た。シジュウ  
カラも、コガラも、ア

(小沢広記さんの庭に来たコウライキジ=写真・萩 千夏)





## 追われゆく野鳥類

### トンボよお前もか

#### ●滝ノ上のトンボ

先日、網走支庁管内の役場の方々と懇談しているとき  
滝ノ上の産業課長さんが

「最近、ホテルを見かけないと思っていたら、今度は  
トンボまで少なくなつてしまいました。そのせいか、鳥  
の数も全く減つていますね」

という。滝ノ上町といえば、奥深い自然の里を連想し  
ていた私にとって、その言葉はショックで、何度も問い  
かえたほどである。

「全くの過疎地帯ですから、工場もなし、大気汚染も  
考えられませんし、農薬のせいでしょうか」

と首をかしげる。

「ホテルを見かけないのは全国的な傾向ですが、トン  
ボまでとはね」

と、私も合づちを打つたが、心に空漠とした波紋が広  
がるようであつた。

本道のトンボの大部分のものが渡りをすることは、あ  
まり知られていない。したがって、滝ノ上町のトンボが  
減っているのは、かならずしも、滝ノ上町の農薬汚染が  
原因ではなく、トンボの繁殖地や、渡りの経路の影響が  
現われたものであり、野鳥の数が減っているのも、また  
同じ理由によるものであろう。

こう見てくると、野鳥にとって、ある地帯の生息環境  
を守ることができれば、それで保護されるとはいえない  
わけで、地球上のある部分における大気汚染や、自然環  
境の破壊が、豊富な自然にめぐまれた奥深い地帯にまで  
波及しているのである。

#### ●女満別のアオサギ

女満別町の網走湖畔に、アオサギの営巣地がある。網  
走市の鳥獣保護員・大西重利さんに聞いたところでは、  
この営巣地にも、環境破壊の波がひたひたと押し寄せて  
いるそうである。

その第1が農薬によるもので、営巣地の近くで収容さ  
れるアオサギを解剖してみると、胃の中が黒く融け、肝  
臓障害をおこしており、明らかに薬物による中毒死が判  
断できるという。

それに加えて、写真を撮影しようともぐりこんでくる

人たちが、下草を踏み荒し、彼等をすつかりおびえさせ  
ているようだ。だからアオサギは、人影を見かけるとす  
ぐ飛び上がる。それを狙つてカラスの群れが、卵やヒナ  
を襲うのである。周辺の餌場も次第に破壊されていると  
いう。これは女満別のアオサギに限つたことではない。  
野幌でも、苫小牧でも、浦幌でも同じような現象が現わ  
れている。

またアオサギばかりでなく、稚内港ではウミガラス等  
の海鳥が、工場排水で、ばたばたともがき死んでいると  
いう。海水の汚染は、臨海工業地帯だけのことでなく  
なつたのである。そして、この広い空の下で、鳥獣ばか  
りではない。人間さえその生命をむしばまれている。

#### ●目ざめゆく若い狩猟者たち

やはり網走地方の狩猟者の方々と懇談したとき、女満  
別町の田中良平さんが

「網走地方も、全く野鳥が少なくなりました。狩猟者  
も保護のことを考えないと、もう狩猟の将来はありません  
ね」と、しみじみ述懐していた。

田中さんは、親の代からのハンターで、人一倍狩猟好  
者でありながら、ガンの捕獲は禁止せよという。少なく  
なつたガンを追いかけて、狩猟者のマナーが低下してい  
るし、狩猟期間も、むしろ現在より遅らすべきだとい  
う。

1羽でもよいから、成熟したカモを追いかけて、1発勝  
負を試みたいというのが田中さんの念願で、10月1日の  
解禁では、まだ換羽期のカモが多く、撃つにしのびない  
のだという。

老成した狩猟家の多い中で、田中さんなんかは、まだ  
若輩であろう。しかし、この田中さんの言葉は、狩猟者  
自身の認識を示すものとして、嬉しく拝聴した。

自然物を対象とする狩猟者こそ、自然のよき理解者で  
なければならない。最近、若い狩猟者から、ぼつぼつと  
こんな話しを聞くことができるようになった。

若さというのは、ものごとへの柔軟性と、探究心を意  
味する。自然を保護しようという大きなうねりの中で、  
考える狩猟者になつてほしいものである。

(写真・小樽市 渡辺俊夫)



菅  
野  
寿  
衛  
吉

## キ ツ ツ キ

北海道の冬の庭は、ほんとうの枯山水である。荒涼たる冬庭は、その寂しさのゆえに趣むきがあるが、野鳥を招くのがぜん活氣にあふれてくる。パンに群がるスズメ落花生をくわえて灌木にかくれるシジュウカラ。リンゴをほじくるヒヨドリ。樹幹にくくりつけた脂肉をたたくキツツキなど、なかなか賑やかなただずまいになる。

窓を閉めているから小鳥たちの声は遠いが、天気の良い日など、餌を置きに庭へ出てみると、あちらこちらからさまざまなさえずりが聴こえてくる。

アカゲラは鳴き声こそ地味だが、仕ぐさの面白さと、美しい色彩とで、わが庭の主賓である。

去年の10月頃であつた。畑の手入れをしていると、どこかでキョッ、キョッという音がしたように思つた。どこかで聞いたような音だと思いながら、別に氣にもとめないでいたところ、畑を終つて庭へ回つてくると、アカゲラがいたので、ああ、これだつたのかと氣がついた。

それにしても、この秋はずいぶん早くに姿を現わしたものである。いつもの年だと、わが家の庭にキツツキが姿を見せるのは、だいたい根雪になつてからである。

もつとも彼女らは、渡りをしないのだから、ひよつとすると、氣のつかないときにも1年中来ているのかもしれない。

アカゲラはキョッ、キョッと低く短かく鳴く。これは警戒音だそうである。木の幹をすべるように登つてゆきまたあとすざりして降りてくる。幹をつつくときには、2本の後趾を外側に張り出し尾羽で体を支えている。

彼女は餌を叩きながら八方に氣をくばっている。人と目が合わなければ、1メートル位まで近づいても、あんがい平氣でいるが、遠くにいても目が合ると、はずかしそうにくると木の裏側に身をかくし、こちらの様子を見ている。

アカゲラがカマボコ板に打ちつけてある脂肉を叩く音は、まるで電氣ハンマーである。どういう仕掛で、あの

ように音を震動させることができるのだろうか。他の動物がもしキツツキの真似をして、続けさまに頭を叩きつけたら、きつと脳しんとうをおこすに違いない。

キツツキの舌は、頭を縦にひと回りして鼻腔にくっついているそうであるが、頭の中もよほど風変りにできているに相違ない。

キツツキの仲間は、あの叩音によつて縄張りをきめたり、配偶者との合図を交したりしているのだそうである。多くの鳥が声楽やダンスに長じているのに対し、キツツキは打楽の名手である。そう思つて聞くと

か、彼女等の叩音にはリズムがあり高低がある。雌雄によつても叩き方が違うのかもしれないが、種類が違えば明らかに音色は変る。

ときどきヤマゲラがくるが、彼女の音はアカゲラよりも低くて太い。キツツキは音を使いわけるために、木の種類や叩く場所を吟味しているように思われる。いろいろなところを叩いてみては、しばらく考へている。

シロホンの調律をしているのだろうか。彼女たちがお堂の柱や電柱を叩くのも、あながち虫を探すためばかりでなく、それによつて仲間への信号を送つているのであろう。小鳥たちの交す言葉を聞きわけることができたらどんな楽しいことだろうといつも思う。

私の生家は、鎮守の森を背にしていたので、いつもキツツキの音が響いていた。母の話によると

「キツツキは親が危篤だというのに、ベニ・カネつけて髪結うて、お化粧に夢中になつていたので、とうとう親の最期をみとることができず、その罰で、今でもああして1日中、寂しい森の中で、独り木を叩いている」のだそうである。

その伝説の真偽のほどは別にして、暗く静まりかえつた森の梢から、コツ、コツとたえまなく響いてくる音。忍者のような身動き。木から木へ、さわさわと移るあの羽ばたき。子供心にとつてキツツキは、森の魔物のように思えてこわかつた。

だが、いま私が見ているアカゲラは、赤いベレー帽に赤いズボン。アラバスクのマントをつけた飄軽者の小人である。  
(札幌市・北電監査役)

野鳥だよりに皆さんの原稿を寄せて下さい。皆さんの身近かで発見した野鳥の記録や、感想文や愛護会に対する意見でも結構です。とくに写真を歓迎します。次回の発行は5月ですから、4月10日頃までに提出願います。

# 函館山の野鳥

函館市 隅田 重義

## ■ 自然を愛してさすらいの日々

私は自然をこよなく愛する。それはよわいを重ねるごとに深くなり、旅と、釣りと、狩猟に向けられている。

白く匂うこぶしの花の下で、溪流のささやきに、野鳥の声に、生き返るような喜びをかみしめる。郷土函館に生まれ、北海道の大自然にとりつかれたように、いくたび道内をさすらつたことであろうか。

根室の岬に立つて、エトロフ島へのあこがれから、北千島まで足を運んだこともあった。そしてカムチャツカの山々は、今も深く私のまぶたに焼きついている。

私は今、函館山鳥獣保護区の管理員をしているが、四季折々に聞く函館山の野鳥の声は私の生甲斐である。もちろん専門家ではないので、詳細な解説はできないが、美しい函館の夜景とならび、色どりをそえる可憐な野鳥の姿と、全山に溢れる野鳥のコーラスを、紙上を借りてみな様にお伝えしたい。

## ■ 山に帰ってきたウグイス

凍りついた風がなごみ、南風が津軽の海を渡ってくる頃、函館山は次第にその容姿をととのえる。津軽の海に突出た美しい山容は、船から見る人の心をなぐさめるばかりでなく、渡り鳥を数多く迎える。

3月、まだ固い桜のつぼみにはもう可愛らしいウソが群れ、フィー、フィーと鳴く。長い冬ごもりから解放されて、それらを迎えるように、ヒガラ、ヤマガラ、コガラ、アカゲラなども、入れかわり立ちかわり活潑な動きをはじめ。こうして雪どけと共に、数多くの観光客や探鳥のための人々を迎え入れる。

函館山で何よりも私を喜ばしてくれるのは、いつとき全くかげをひそめていたウグイスが、緑濃い、静かな谷地頭の海を見下す青年の家の回りで、最近をよく聞くことができることである。

ここは「函館山の野鳥研究」で有名な千田さんの住家である。立待岬のやぶに3羽しかいなかったウグイスが、いまは函館山で精一杯の美声が聞かれるようになった。

最近、観光客や車の数も多いが、いつまでもウグイスの声を聞くことができる環境にしておきたいものだと願わずにいられない。

## ■ 山をいろいろの野鳥たち

キジバト 街の騒音を去って、函館山で心静かに聞く

キジバトの声は、平和を悟つたさびのきいたものである。通称をヤマバトと呼ぶごとく、たしかに山にこだまして、奥深い味わいがある。

ミデデポーポーと、深山にこだまする声に、はじめて北海道の夏らしい気分を感じるのである。この静けさを保つためにも、函館山のやぶを切り払ったり、バスを乗り入れることはやめてもらいたいと思う。とくにこの地が戦前、要塞であつたことを思うと、キジバトの声にのどかな1日をかみしめることができる。

セキレイ ほんとうに清純な感じの鳥である。さしづめ貴婦人というところ。岩の上、倉庫の屋根の上に、スマートな身むなしで、さかんに尾を上下にふる。たまにキセキレイを見ることもできる。

カツコウ 函館山で初夏を告げるのはカツコウである。若葉のしたたるような朝露の中から、カツコウ、カツコウと響く声に、夏の気配がひとしお身にしみる。

ホトトギス 静かな谷地頭で聞くホトトギスの、ミテッペンカケタカミは、さらに野鳥に対する親しみを増すところが、最近では数が少なくなっており、なんとしても保護してやりたい鳥である。

ヤマガラ 最近、山麓の家の庭先に姿を現わすようになり、数が非常に多くなった。

イカル めつたに低地帯では見られない鳥だが、函館山で見ることのできるのは、繁殖しているゆえか。

ビンズイ、シメ、ハギマシコ、キビタキなどもよく見ることのできる野鳥である。これは植物にめぐまれた環境の故であろう。

先日、朝早く巡視したとき、カタカタカタ……と音がする。白、黒、赤と配色の鮮やかなアカゲラである。ツグミ、ヒヨドリ、ジョウビタキも多く見ることのできる

あの小さなミソサザイも、当山の賓客である。穴澗付近の断崖を見上げると、威勢よく飛んでいるのはイワツバメである。立待岬ではいらだつたようにイソヒヨドリが叫んでいる。そのほか、ルリビタキ、チョウゲンボなど、数えあげればきりがなほど野鳥は豊富である。

最後に、函館山は国設鳥獣保護区であるが、この聖地を管理するため、管理所の設置が望ましい。

(鳥獣保護員)

## 札幌のキツツキ

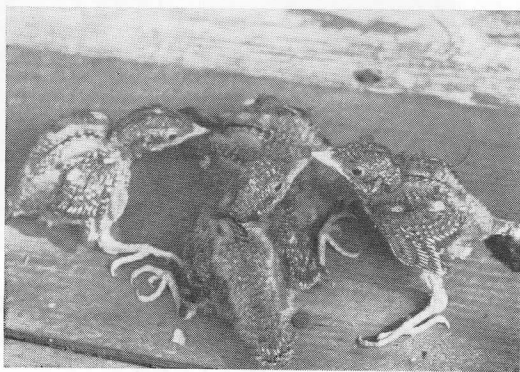
写真と文 土 屋 文 男

市内で、いくらでも各種のキツツキが見られると言うと、本州から来た人たちは勿論のこと、古くから札幌に住んでいる人も不思議な顔をするが、この街が昭和36年5月以来、広域都市となつたので、当然のことである。

1 昨年のものであるが、円山に住んでいるK氏から電話で、いま、クマゲラが庭の餌台に来ていてと弾んだ声で言った。仕事が忙がしくて見に行けなかつたが、説明を受けた限りでは、雌のクマゲラに間違いなかつた。

冬の餌台を訪れるキツツキは、バックが銀世界だけに点景として美しい。下の方かららせん状に、ツツツと樹木の上の方に移動してゆくが、こちらのカメラを意識すると、幹の向う側へかくれて、ときどきこちらを盗み見る様子もおかしい。

さらに一定の距離を縮めると、パツと飛び立ってしまう。しばらくカメラのレンズを通して、キツツキの眼の動きを追うのも面白い。



写真上、エゾミユビゲラ（北大博物館）  
下、アリスイのヒナ



アリスイは、外観も生態もキツツキとは思えないほど変つた鳥だが、わが家の前の藻岩山で、夏の間よく見かけた。名前の如く地面に舞いおりて、熱中してアリを食べる。

私が東保健所長の頃、藤の沢小鳥の村の村長さんをしている小沢広記さんから、電話で、とにかく、めうな鳥がコムドリ用の巣箱に入つたから見てほしいとのこと。

仕事の合間に立寄つて調べたら、アリスイのヒナが4羽いた。巣材はなく、中止卵の白い卵殻が1個分あつたやがて元気に巣立つて行つたとのことであつた。（写真1）

毎回の探鳥会に、お元気な姿で参加される井上元則博士の発見されたエゾミユビゲラのことは、先生より再三お話しを聞いたが、もちろんこのキツツキとは対面がない。しかし、わが家の「野鳥のアルバム」には、植物園にある標本の写真が数葉貼つてある。（写真2）

（札幌市・医師・本会副会長）

## ヒバリはいつ帰ってくるでしょうか？

もう間もなくモズが戻ってきます。3月下旬には、なつかしいヒバリの歌も聞くことができるでしょう。

ヒバリやカッコウなど、冬のあいだいなかった鳥をはじめ見て聞いたりした日（初認日）、ハクチョウなど、冬ずっといた鳥がいなくなつた日（終認日）の、今年の記録を事務局までおしらせください。鳥の名前、記録した年月日、場所、それにあなたの名前も忘れないように。ハガキに、たとえば、ヒバリ 3月28日 札幌市真駒内 ○野○子 と書いてくだされば

よいのです。注意することは

- (1) 今年の記録に限ること。
- (2) 自分の家の近くや通勤コースなど、いつも観察できるところの記録に限ること。一年に一度しか行かないようなところで見ても、初認、終認とはいえません。

さあ、どんどん記録を送ってください。

（幹事 百武 充）

# 連

# 雀

井上元則

## 青

畝の句に「緋連雀一斉に立つてもれもなし」というのがある。ことほどさようにこの鳥は数十羽の集団となって渡来する冬鳥である。

夏は北極圏からシベリヤ地方で繁殖し、早きは11月ごろ北海道、本州、九州にまで渡つて越冬し、おそくも5月までに北へ帰つてしまう。同類に黄連雀というのがあり、習性はよく似ており、時には両種が混つていることもある。

ともに連雀科の鳥で、普通絵画に画かれているのはキレンジャクで、マンサク、チュウペイドリ、デンジャクホヤドリ、トツキンカブリ、ベンジャクなどの俗名がある。ヒレンジャクの方は、アキタズメ、ホヤドリ、ホウネンチョウ、ヤナカドリ、ベンジャク、ベンシヨク、シユンコウなどの俗名があるほどで、昔から本州の方々からも親しまれてきた。

ここ野幌では、12月から3月ごろまでにしばしば現われ、イボタの実を好んで食う。1~2月頃になって、イボタが雪の中に埋まると、庭にある丈の高いナナカマドの真赤な実を食べているが、一樹の実を食いつくすと、隣家のそれに移り、転々とナナカマドの実を追つて南下し、函館郊外では2月11日の紀元節のころが最盛期であった。

## 野

幌で吹雪が続くと、人里にこられないので、森林公園の大きな広葉樹についているヤドリギや、漿果や、ヤマブドウの実をついばむ。

お互いに鈴の音のようにヒリヒリ、ヒリとなきながら同族の存在を知らせ合つて、春光うららかな雪どけを待ちながら餌を追つて飛びまわるのん気ものである。

青森地方で「ホヤドリ」という俗名があるのは、「ホヤ」は寄生樹の方言であるからである。また本州ではシナノガキの果実、クロウメドキの核果ヤツデの実などをよくついでばむ。

ヒレンジャクの色彩は、雄は上面が美しいブドウ褐色で、先端に鮮やかな紅色がある。頭上と後頭の羽は長くて羽冠をなしている。翼は青灰色で、初列風切の先端に紅色があり、大雨覆の先端も紅く、下尾筒も紅い。雌はだいたい雄の色彩に似ているが、下尾筒の紅色がほとんどない。雌雄ともに黒色の眉斑があり、腮と喉が黒く胸部はブ

ドウ色で、腹は灰色である。

キレンジャクの形はヒレンジャクに似るも、体が幾分大きい。尾端が鮮黄、初列風切の先端も黄色で、次列風切の先端には、洋紅色の蠟状付属物があり、下尾筒が濃い栗色である点が前種と異なるが、素人の目には尾端が黄色か紅色かで見分けられる。

## 連

雀類は燕雀目、連雀科の鳥で分類学上モズ科とセキレイ科の中間位におかれているが、頭部に羽冠を有する点が著しく異なる。

この鳥類は冬鳥であるから、絵に画くとき、あるいは句をよむとき、季節はずれの植物と配したのでは全く実感がわいてこないもので、注意しなければならない。

またこの鳥の糞は、種子が消化しないで排出されるので、種子の分散を助ける。またヤドリギの漿果を好んでついでばむが、この糞に強い粘着力があるので、翼か羽毛に付着して運ばれて、よそに行つてまた芽を出す。したがつて、レンジャクがヤドリギの分布を広めているかんじようである。なんと自然界の妙趣には驚嘆せざるを得ない。

(江別市・北海道栄養短大教授、農博)

## 本会の会員を募ります

1. 会員の資格は、どなたでも入会できます。
2. 会費は年額1人300円。団体は1000円です。加入希望者は会費を添え、住所、氏名、職業を明記のうえ申込んで下さい。
3. 加入申込みは、道庁林務部林政課内「北海道野鳥愛護会連絡事務局」に提出して下さい。

キレンジャク (写真・野村梧郎)



# 白鳥で結ぶ友情

## 井上副会長から ソ連総領事へ 生徒の作品を

別海村の尾岱沼は、最盛期には六千羽を越えるオオハクチョウが羽を休めますこれは、厳しいシベリアの寒波を避けて尾岱沼で越冬するためですが、この中には、幼鳥や、長途の旅で疾病におち入り保護を要するものも少なくありません。

野付中学校は、早くから、こうした保護を要する白鳥の收容や介護をし、また昭和四十二年春の大寒波で、尾岱沼が凍結したときなど、男性徒が海中に飛びこんで、水を破つて白鳥の救護にあたりました。

野付中学校では、こうした保護の実績を、作文や図画にまとめ、白鳥の繁殖地であるシベリア東部の学童と友情を深めるため、ソ連へ送ることになり、一月六日ソ連総領事館において、本会の井上元副会長から、バンドウラ総領事に手渡しました。

これに対して、バンドウラ総領事は丁重な礼を述べ、お返しとして、ソ連製のコケシ(マトリョウシカ)や、絵葉書、雑誌類をどつさり託されました。会では、幹事の萩千夏さんが、根室地

方の白鳥調査に赴く機会を利用して、野付中学校にお届けしました。野付中学校からは、ソ連領事館と、本会に下記のような礼状が届きましたが、その一部を掲載いたしました。

### (愛護会に感謝)

生徒会長 三年 津田一邦  
私たちのため、先日はありがとうございました



います。次の日にはテレビにも新聞にも出ました。私たちの母校、野付中学校も全国的に注目されました。

この尾岱沼には沢山の野鳥がいます。私たちの学校では、毎年植林の際に巣箱をつけています。現在では、野鳥が減ってきているということを、新聞やテレビで見たり聞いたりしました。野鳥が減ると、樹木を虫が食べ、木が枯れてしまうとか、種子を運んだりします。三年生のとき植物のはたらきについて学びました。

植物は光合成を行ない、空気中の二酸化炭素を取り入れ、酸素を出すはたらきをしています。現在では、日本の工業が著るしく発達したため、空気のごれが目立つてきました。

このままでは日本は、よごれた空気につつまれて、たいへんなことになりそうです。野鳥を可愛がること、が、私たちの生活を維持していくうえで大事なことだと思います。

現在 この世の中から消えかかっている野鳥がいます。このような鳥が、いつまでもこの世の中か

ら消えないように努力して下さい。私たちもできるだけ協力したいと思っております。

野鳥保護委員

三年 須藤 旬子

先日は、私たちのためにいろいろとお世話してくださいましてどうも有難うございました。私の通っている野付中学校は全校生徒百人という小さいものです。

生徒会の中に、野鳥保護委員会があります。最近、とくに町などでは野鳥も見あたらなくなりましたが、わが校では夏野鳥保護委員会を中心に、巣箱を作ったり冬は白鳥その他の鳥の、保護観察活動をしています。

とくに冬は、シベリアから白鳥がくるためか、春別川一帯がすばらしくにぎやかになります。

去年は、白鳥も人間に慣れて、道路の上を歩いたり、窓の近くにまで寄ってきて、えさを食べるようになりました。いつも家のそばに居るため、みんな白鳥をかわいがっています。そのためか、白鳥は四月頃まで家の近くに二・三羽がとどまっています。

今度のことを機会に、これからもう一つ、そう野鳥保護に努めたいと思っております。

# 野鳥の観察記録をつけよう

美唄市光珠内 藤 巻 裕 蔵

印象深いことはいつまでも記憶に残っているのですが、大部分のことはその場かぎりで忘れてしまうものです。山道を歩きながら鳥を見たときでもそうです。ところが、ふだんなんでもないようなことでも、これを記録しておく、いろいろと役にたつことがあり、またたのしみがあります。

## 1. 記録は鳥をおぼえる近道

私をはじめ探鳥会に参加したとき、リーダーがまわりで鳴いている鳥や飛んでいる鳥の名前をつぎからつぎと教えてくれるのには感心しました。一応図鑑ではたいの鳥をおぼえていたのですが、それが実物となかなか一致しないのです。鳥の種類を見分けることは、図鑑と見くらべてすぐできるというようなものではなく、なれないとなかなかむずかしいものです。

昨年秋、石狩川河口での探鳥会では、タカブシギやホウロクシギなどふだんあまり見かけない鳥をみることができました。「ピッピッピッ、あの声がタカブシギの特徴です」。「くちばしが下に曲った大きなシギはホウロクシギです。これと似たシギにダイシャクシギがいますが、腰が白いのでホウロクシギとは区別できます」。見分け方のコツは特徴をつかむことです。このような特徴をおもに解説した図鑑やガイドブックが出ていますがまずは自分が出合った鳥の特徴を確実におぼえるようにすることです。

探鳥会で説明を聞きながら見ていると、その場ではなるほどと思つていても、よほど印象がよくないと、しばらくしてわすれてしまうものです。こんなとき、自分で確かめた特徴を自分なりに記録しておく、おぼえやすく、あとで役に立ちます。とくに鳴き声の場合は、同じ鳥の声でも、人によって多少ちがつて聞えるので、自分なりに記録する方がおぼえやすいようです。

また、探鳥会以外で、自分の知らない鳥に出合ったとき、見たままを記録しておく、あとで図鑑を参照したり、人に聞いたりして種類がわかります。記録する事項は、いつ、どこで、鳥の大きさ（例えば、スズメくらい、ハトくらい）とび方（直線か、波状か）翼の動かし方（はやいか、おそいか）など、の特徴です。また鳥の形をかいて、体の色や模様などを記録します。このようにすれば、見ても種類のわからない鳥は一つずつなくなっていくでしょう。

鳥を見たら、必ずノートに記録する。これのくりかえしが鳥をおぼえる近道です。

## 2. 記録のたのしみ

毎年春には南で冬越ししていた鳥たちが北海道に渡ってきますが、渡ってくる日は鳥によって大体きまつていきます。3月になるとカワラヒワがやってきます。私はこの鳥が「キリリリ、コロコロ」と飛びながら鳴くのを見ると、春になつたなと思います。こうして鳥のカレンダーで季節のうつりかわりを追つてみるのもたのしみです。

私の観察ノートから、カワラヒワ、オオジシギ、アカハラ、カツコウを初めて見た日をひろってみると、表1のように、札幌付近ではカワラヒワ3月～4月上旬、オオジシギ4月20日ころです。年によつて多少のちがいはありますが、人間のようにカレンダーもないのに同じころ渡ってくるということには感心します。毎年の記録をとつておいて、今年のカツコウの日は○日といったような鳥のカレンダーをつくってみたらどうでしょうか。

春から夏にかけて藻岩山や野幌の原始林に探鳥会に行くと、1日に30～40種の鳥をみることができます。

また、場所をかえて海岸や草原に行けば、森林の鳥とは別の鳥が見られます。それを毎回記録しておく、自分で見た鳥のリストはどんどんふくれあがり、すぐ100種になります。

表1. 札幌付近でのカワラヒワ、オオジシギ、アカハラ、カツコウの初認日（ ）内は観察場所

年	カワラヒワ	オオジシギ	アカハラ	カツコウ
1957			5.10(北大農)	5.19(藻岩山)
1958		4.22	5.2( " )	5.22(北大農)
1959	3.4	(北大農場)	5.3(野幌)	5.24(藻岩山)
1960	(北大構内)			5.18(北大農)
1961	3.19			
1964	(北大構内)		5.4(藻岩山)	5.20(○岩山)
1965			5.10(植物園)	5.24( " )
1966		4.21(美唄)	5.3(美唄)	5.16(美唄)
1967	3.30(美唄)	4.20( " )	4.27( " )	5.19( " )
1968		4.20( " )	5.4( " )	5.18( " )
1969	4.9( " )	4.20( " )	5.1( " )	5.19( " )
1970	4.1( " )		5.13( " )	5.19( " )

こうして自分で見た鳥のリストをつくり、1種ずつふやしてゆくのもたのしいものです。日本で記録されている鳥は420種近くいますが、この中にはスズメやカラス類のように身近にいるものから、迷子で日本にやってきたものまであり、全部の鳥の名を自分のリストにあげるのはまず不可能でしょう。しかし、何種類までいくかさつそく記録をはじめてはいかがですか。観察記録をつけるたのしみがふえると思います。(つづく)



# 白鳥6態

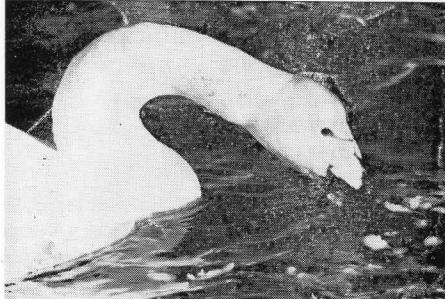
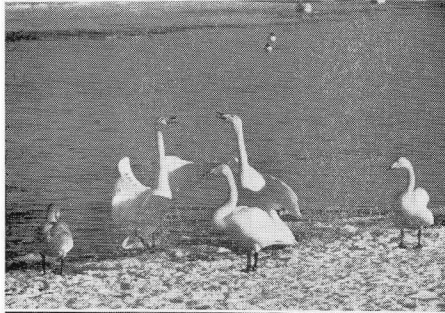
網走市北浜中学校

写真と文

玉田 誠

## 写真説明

- ① 着水後、ゆき足で2m程度滑水したときの状況。  
やがて岸に這い上がり
- ② 「ヤー、ヤー」と、まずは仲間同志でご挨拶
- ③ 「ヤー、ご馳走さま」と、パンを食べている。  
かと思えば
- ④ こちらは、ヨダレ???をたらして見ている。
- ⑤ 毎朝、世話をしてくれる生徒からは、おすわりで餌をもらおう行儀のよさ。
- ⑥ 手うつしで餌を食べてくれるようになっては、可愛くて離れられず、時には学校にも遅れる仕儀とは相成る。



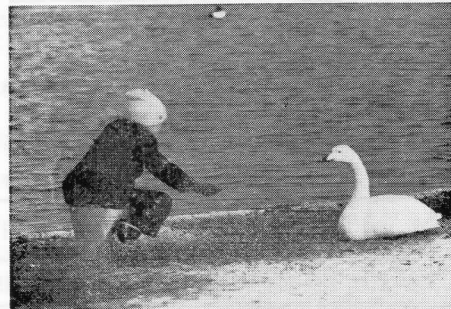
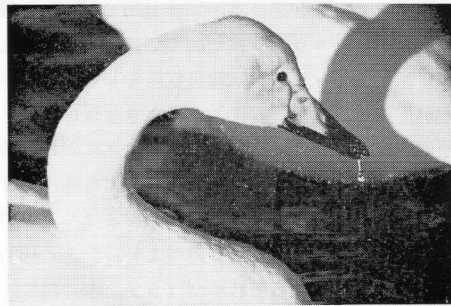
白鳥は警戒心がとくに強く、なかなか人には慣れない鳥だといわれています。

しかし、一週間、二週間と根気強くつき合っているとこちらの姿を見かけると、大急ぎで泳いでくるものや、対岸から飛んでくるものもあり、餌をねだるかのようによく普通では聞けない鳴き声をたてたり、いろいろなしぐさを眼前に展開してくれるようにさえなります。

私と白鳥とのつき合いは、例外を除いて、毎朝7時半頃から8時15分頃であるため、写真もあまりよい仕上りのものが少ないのですが、一般にはあまり見受けられない姿態を紹介したいと思います。

ところで、最近新聞紙上で、苫小牧の沼で4羽の白鳥が射殺された記事を見ました。人間の善意が通じ、やっとな人間を信用し、人間に近づいた白鳥を、別の悪意に満ちた人間が撃ち殺す。なんといたましい事件でしょう。殺された白鳥は、きっと人間の善意が通じ、人間をおそれなくなっていたものと思います。これはだまし撃ちでなくてなんでしょう。

野鳥保護心がける人たちに冷水を浴びせるような事件に、いかりとも、悲しみともつかない思いをいただいています。



## 巣箱の話

### 巣箱の作りかた

巣箱にはいろいろな形や大きさがあり、また材料も木の板、コンクリート、タケなどいろいろなものがありますが、野鳥に利用させるには、ある条件にかなったものでなければなりません。もっとも大切な基本的な条件は

- ◇中の広さが適当であること
- ◇底から出入口までの高さが適当であること

この2つに注意して作り、後にのべるような適当な場所にかければ、野鳥が利用する条件はそろったこととなりますが、さらに繁殖を支援を行なわせるためには、つぎの点にも注意してほしいものです。

- ◇動かないようにつけること
- ◇手入れに便利のように、開閉装置をつけること
- ◇雨が中に入らないように工夫すること
- ◇入った水が外へでようになっていること
- ◇じょうぶであること
- ◇とまり木やとまり台をつけないこと

このような条件を満たすために、いろいろな工夫をしてみることです。

### 巣箱をかける場所

利用させようと思う鳥がいる場所でないと無理です。スズメやシジュウカラはたいていの林や庭にいますが、キビタキやキツツキ類は棲息状態をしらべてからかけた方がよいでしょう。ムクドリは大きな森林より、林縁部や田畑の近くの林や、人家の近くの木にかけた方がよく利用します。都会のビルの高所などでも利用します。

巣箱は木のしげみにかけてはいけません。前のひらけた枝のない幹に直接つけるのがよいのです。適当な木がなければ杭をたててそれにつけます。木の横枝にのせたり、固定した時に上向きになるのはよくありません。

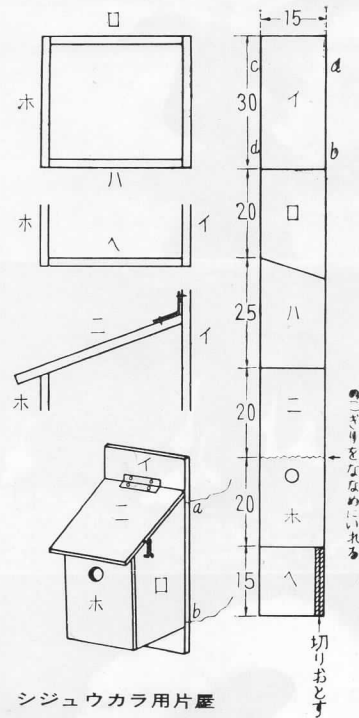
### 巣箱をかける高さ

シジュウカラやヤマガラは、巣とする穴の高さはこた

### 巣箱を利用する鳥の種類と巣箱の大きさ

(単位cm)

鳥の種類	巣箱の高さ	はば	奥行	底から出入口までの高さ	出入口の直径
シジュウカラ類	20~23	12~15	12~15	15内外	2.8~3.0
ムクドリ コムクドリ	28~40	15~17	15~17	18~22	4~6
コゲラ	28~30	11内外 (太いところの直径)		20内外	3.5
アカゲラ	33~35	13 " ( " )		25内外	4.5
アオゲラ	37~40	17 " ( " )		30内外	5
ブッポウソウ	26~30	20	24	20	7~9
オシドリ アオバズク	45~55	23~30	20~30	25~30	10~12



シジュウカラ用片壁  
縦型巣箱の板の切りかた

わりませんが、害敵や手入れを考えると2~3mがよいと思います。ムクドリは4~5m、キツツキは3~4m、アオバズクは5m以上、キビタキやキセキレイは2~3mが適当です。

### 出入口の方向

あまりこだわらなくてもよいですが、繁殖期である3~7月の風向きを考えて、雨が降りこまない方向にしましょう。

### 木につけるときの注意

後板を長くして、四すみに小穴をあけて針金を通したり、後板にそえ木をつけてそれにゆわえつけて固定させます。針金を使うときには幹を痛めないように、スギ皮や古い皮、細い枝などははさんで針金をしめるようにしましょう。

### 巣箱をつける時期

野鳥の産卵期は4月~7月ですから、おそくとも4月上旬までにはかけてやりたいものです。それは野鳥たちは巣をつくる前から巣穴をさがすからです。またあまり早く9月や10月にかけると、ハチやクモやムカデなどの越冬の場所になって巣箱の中がよごれてしまいます。

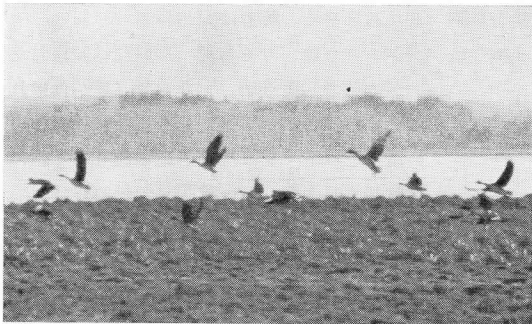
シジュウカラやヤマガラは冬の間巣箱をねぐらとしても使いますから、シジュウカラ用の巣箱は11月~12月にかけてやると有効なわけです。(日本鳥類保護連盟 庭に小鳥を...より)

## 原生花園のマガン

網走市 大西重利

11月18日、12時30分のことです。鳥獣保護員の任務のため巡視中、網走原生花園の展望台から、200米ぐらい北浜寄りの、国道から40米の牧場の中で、マガン11羽の群を発見しました。

鳥獣保護区の子が読めるかのように、のびのびと遊んでいる姿に、ふとほほ笑ましさを感じました。



## 愛鳥活動と児童

岩見沢市 大垣内 四郎

私の勤務していた孫別小学校は、同校区に建設された新設校に吸収の形で、12月31日閉校になりました。

昭和40年5月、愛鳥モデル校に指定されてから、今年度の野鳥保護実績発表を最後に、孫別小学校としての保護活動は終りになりました。最後の年には、保護活動に全校生14名が当りましたが、観察活動は6年生3名だけの淋しいものになりました。しかし、この活動を続けてきた児童の心の中には、何かが残り、何かが生きてゆくと考えます。ここで、12月にまとめた観察記録誌「むくどり」から、児童の心の動きについて述べてみたいと思います。

児童の心の動きは、着実にはつかみ得ないが、野鳥に対する態度、言動の中から、ある程度察することができる。それを知る方法として、昭和39年には、一貫して詩作文を書かせた。

昭和40年には、より具体化し、毎朝の自習に詩、作文を書かせたが、「小鳥は可愛い」「小鳥のように空を飛びたい」という表現で、一般的なものであった。

41年の詩集「山の学校」では、「かわいい小鳥、どん

な生活をしているのかな。小鳥としやべれたら……」と生態を知り、もつと身近かに接したいという探究心が感じられるようになった。

42年の観察記録「むくどり」第2号では、野鳥が巣立ちしたあとの様子を「巣箱のどこにも入っていた小鳥もういない。これだけ大切にしたいのに」と、もつと親しくしたい心情が示され、巣箱については、「1つ1つちやんと手入れをする。来年もまたこの巣箱に入つてちょうだいと祈りながら」と、保護への積極性が示されている。また44年の観察記録では、「クイナが死んでしまった。ぼくたちは元気がなくなつた」と、けがで死んだ鳥について、わがことのように悲しんでいる。

また巣箱については、「ヒナだ、ぼくのつくつた巣箱でヒナが生まれた。うれしい。とびあがるほどに…」と親密の度合いを示している。

そして45年の詩を見ると、「すつとするような緑の小さな卵、やがてヒナにかえる。そして一番先にわかるのが光。卵の中では無かつた光だろう」と、神秘的な見方のなかに、科学心が培われていることを知ることができ。 (「むくどり」お別れ号より)

12月26日の閉校式の時には、児童たちがえづけをしたコウライキジが、式のとときに3~4mの所まで来ていました。コウライキジは、お別れを知っていたのでしょうか。

## 鳥だより

(鳥獣保護員の報告)

### 荒関 三郎 (稚内市)

12月3日、恵北地区で、ユキホオジロ約60羽ぐらいの群に合う。午前9時頃のことである。

12月6日、大岬地区の黒岩付近でオジロワシ1羽を目撃する。これは相当長期にわたつて滞在しているようである。

12月23日、恵北地区の新山牧場で約50羽のコキホオジロを見る。この群は以前からのものらしい。えさにめぐまれていたものと思われる。

12月27日、大岬付近の海上にコオリガモ8羽、ウミアイサ6羽を発見した。

### 竹内 清美 (稚内市)

12月27日、正午頃豊富町兜沼の近くの雑木林で、シロフクロウ1羽を発見したが、幼鳥らしく、まだ斑点が消えていなかったようである。

渡辺 徹 (浜頓別町)

12月5日、正午頃、鳥獣保護区の大沼に、オオハクチョウ130羽と、約400羽のカモ類を見た。これも18日頃になつて、結氷が90%を越えたため、オオハクチョウは1羽も見られなくなった。

12月23日、午後からの巡視で、豊浜の舟の上に止つているオジロワシ1羽を発見。海岸の岩場にヒメウが200羽ぐらい、例年より少ない。

片山 弘 (深川市)

12月11日、更進のお寺の庭で、コウライキジオス2羽メス1羽を発見する。この付近で繁殖しているらしい。

12月15日、午後4時10分頃、多度志よりの帰途、納内方面で、上空を編隊で渡る50羽ほどのガンの群れを発見した。

野幌森林公園を歩きましょう

冬のあいだ休んでいた野幌森林公園の探鳥散歩を次のとおり再開します。どうぞおいでください。

◇月日 4月29日、5月23日、6月20日、7月18日

◇集合 5月～7月は午前9時国鉄大麻駅待合室

4月はコースを変えますので、同行のご連絡をくださる方にあらためておしらせします。

◇昼食、雨具、筆記用具などお持ちください。

◇雨天のとき、愛護会の行事が他にあるとき、私に急用ができたときは中止します。

◇おいでになる方は、前日までにご連絡ください。

◇連絡先 札幌市北3西6 道庁林政課 <sup>ビヤクタク</sup>百武 充  
電話 札幌 231-4111-内線3154

第6回探鳥会案内

今年最初の探鳥会をつぎの要領で開催します。早春のウトナイ湖畔、風は少し冷たいかも知れませんが会員多数の参加をお待ちしています。

集合場所 苫小牧市ウトナイ遊園地(中央バス停留所)  
(ウトナイ湖北岸の地域一帯を探鳥予定)

集合日時 3月28日9時。解散は同13時頃

主な鳥 ハクチョウ類、カモ各種(10種類は記録したいが無理でしょうか。)ガン類(運が良ければ。)草原の鳥たち(ノビタキなど夏鳥の早い渡りとハギマシコなど冬鳥の渡りおくれに注意しましょう。……欲張り……。)

その他 昼食各自持参、絶対長靴、適宜防寒の用意。

参考 バス時刻表(札幌-ウトナイ)片道260円

札幌発	7.15	ウトナイ着	8.47
"	8.05	"	9.30
ウトナイ発	12.55	札幌着	14.25
"	13.30	"	15.00

昭和46年度分会費の納入

昭和46年度分の会費300円を納入してください。方法はとくに定めませんが、なるべく5月に予定している総会までに納入してください。

<行事日誌>

1月23日午後2時から、林業会館会議室で、野鳥愛護会新年懇親会を開催しました。

犬飼会長は所用のため出席できませんでしたが、宮脇、井上、斉藤、土屋の各副会長が顔をそろえ、40名が出席するという盛況さでした。

井上副会長のあいさつのおと、事務局から野鳥のカラーライドを上映し、そのあと、斉藤副会長を座長として、自由討議をしましたが、会の運営や、会報の発行、野鳥保護運動の進め方について、活発な意見が続き、5時20分閉会いたしました。

<事務局だより>

◇冬来りなば春遠からじ、の言葉どおり、春がもう目の前に迫ってきました。別記のとおり、第1回の探鳥会を計画しました。新しい年は、理論より行動の年にしたいと思います。多数のご参加を望みます

◇皆さまの原稿や、写真について、一部カットしているものもありますが、編集上の都合でして、なにとぞご了承願います。

◇今度の発行は愛鳥週間の5月になります。増頁を計画しておりますので、1行でも2行でも、遠慮なく原稿を送って下さい。